

一ツ入レ

まご  
カウ

エウアリエ、テオ  
— じむを得ず女になった男の泣。

大佛次郎

フシ

改定

千七百六十三年の六月の事である。倫敦  
にある佛蘭西大使館を新しく赴任して未  
だケルシー伯爵を迎えて問もないことだった。  
大使館の晩餐に招待された佛蘭西人の中にシ

エウアリエの位を<sup>所</sup>してわがテオン・ドウ・ボ  
モンと云ふ男があつて、

いと<sup>味い</sup>あつてかた<sup>あ</sup>と思ふと、やかく椅子にも

たれたまゝ、<sup>寝</sup>つて冬<sup>つ</sup>つた。非<sup>小</sup>は果<sup>も</sup>あり脚

相<sup>客</sup>もあり、<sup>校</sup>全場<sup>台</sup>の光<sup>が</sup>眞<sup>善</sup>のやうに明

るい部屋<sup>を</sup>あつた<sup>あ</sup>ある。人が揺り起すと、デ

オンは<sup>胸</sup>が焼けるやうだと云つて、なほ<sup>普通</sup>あつた

宜<sup>な</sup>が畢<sup>つ</sup>てから、テオンも常態に復した。

しかし、また蒼<sup>か</sup>めてわる顔<sup>を</sup>と向けて、新し

せ印